

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	中野 真備
論文題目	インドネシア・バンガイ諸島サマ人の漁撈における環境認識		
(論文内容の要旨)			
<p>サマあるいはバジャウと呼ばれる集団 (以下、サマ人) は、フィリピン南部、マレーシア・サバ州、インドネシア東部を中心とする東南アジア3か国にまたがって拡散居住する海洋民であるとされる。サマ人については、その歴史的形成過程や社会学的研究に加え、漁撈活動や環境認識の研究もおこなわれてきたが、それらはサンゴ礁に面した汀線部における一面的な調査に限られてきた。そこで本研究は、サンゴ礁のない浅海域から外洋域で漁撈を行う、インドネシア・バンガイ諸島のサマ人における調査から、(1) 海上ナビゲーションとその実践における海上景観の特徴、(2) 海上ナビゲーションが求められる漁撈における環境認識、(3) バンガイ諸島サマ人の漁撈における民俗分類の意味、の3点を明らかにし、彼らの外洋漁撈における環境認識構造の総合的把握を目的とした。</p> <p>第1章では、環境認識に関する先行研究とサマ人に関する先行研究を概観し、海をめぐる民俗分類の研究では生物や無機的自然物、空間がそれぞれ独立したものとして研究される傾向があったこと、外洋漁撈を対象とした環境認識の研究が不足していたこと、サマ人の研究における漁撈活動や環境認識に関する実証的研究が不足していたことを指摘した。そのうえで、本研究の視座は、バンガイ諸島サマ人の漁撈における環境認識を、浅海・外洋域で必要となる空間認識や、生物・自然物・空間の民俗分類から明らかにすることであるとした。</p> <p>第2章では、調査地域であるバンガイ諸島について概観し、この地域はサマ人に関する先行研究と比較してサンゴ礁がきわめて小さく、浅海から外洋域にかけて漁撈が行われるという生態環境条件と、サマ諸語の中でもスラウェシ系サマ語を使うという社会言語学的特徴があることを指摘した。</p> <p>第3章では、バンガイ諸島の1村における調査から、漁撈活動を明らかにした。先行研究と比較した結果、(1) 沿岸から外洋域における釣り漁が頻繁であること、(2) 漁師は浅海から外洋域にいても遠方の目標物を頼りにしており、すなわち「外洋性閉鎖系」とよぶべき海上景観の中で活動すること、(3) 漁師が海上移動する時には複数の位置特定技術を多角的に用いること、という特徴が見いだされた。</p> <p>第4章では、バンガイ諸島サマ人の漁師は、集落を出て目指す漁場に近づくにつれ、海中・海上・上空の様々な情報を参照するようになり、彼らの認知・記憶の層が分厚くなることが明らかになった。他のサマ人の空間認識が面的あるいは線的であるとされてきたのに対して、バンガイ諸島サマ人は漁場という中心に対して三次元的な</p>			

空間認識の構造を持つとみなすことができ、「スポット的な空間認識」と呼ぶことができる。この空間認識は、浅海・外洋で漁を行うために発達したと考えられる。

第5章では、魚類・漁場・目標物に対する民俗分類や命名方法の分析を行った。その結果、それぞれの命名は漁師の視点による海上景観に基づくものであったが、それに加えて他の集団からの影響を示唆する部分もあった。さらに分析すると、魚類、漁場、目標物の命名は必ずしも相互に影響しあうとは限らないが、自然（生物および目標物としての無機的自然）と空間（漁場）認知の関係としては、不可分な関係にあることが明らかになった。

第6章では、本論文の総合的な考察を行った。先行研究における環境認識やサマ人の研究と比べ、本研究が明らかにしたことは、（1）外洋性閉鎖系の海上景観で特徴づけられるバンガイ諸島では、サマ人漁師らは複数のナビゲーション技術を臨機応変に組み合わせて用いていること、（2）人々は単に生物や空間を独立したものとして認識しているのではなく、生物・自然物・空間という要素を相互補完的に関連付けることで漁撈における「位置」を特定していること、（3）人々は命名や分類を通して、自然を利用可能なものとして文化に範疇化していることであった。本研究は、これまでの民俗分類学や民俗生物学の枠組みを超えた、海で生きる人々の生活世界を明らかにする、新たな海の民俗分類学を提起するものである。